令和３年（２０２１）

■ ７ 月 １５ 日（木）

梅雨明けのきざしが見え始めた途端、猛暑を通り越して酷暑・激暑に見舞われました。地下水位は依然として高い水準を保っていて、調査が進んで現れ始めた土層境の斜面のそこかしこから水が湧き出し、斜面を流れ下っていきます。湿度と高温と泥濘の中での調査ですが、音だけはさわやかな渓流にいるかのようです。

設定した２つの調査区それぞれで調査作業が本格化しましたので、調査区ごとに調査のようすを紹介してまいります。

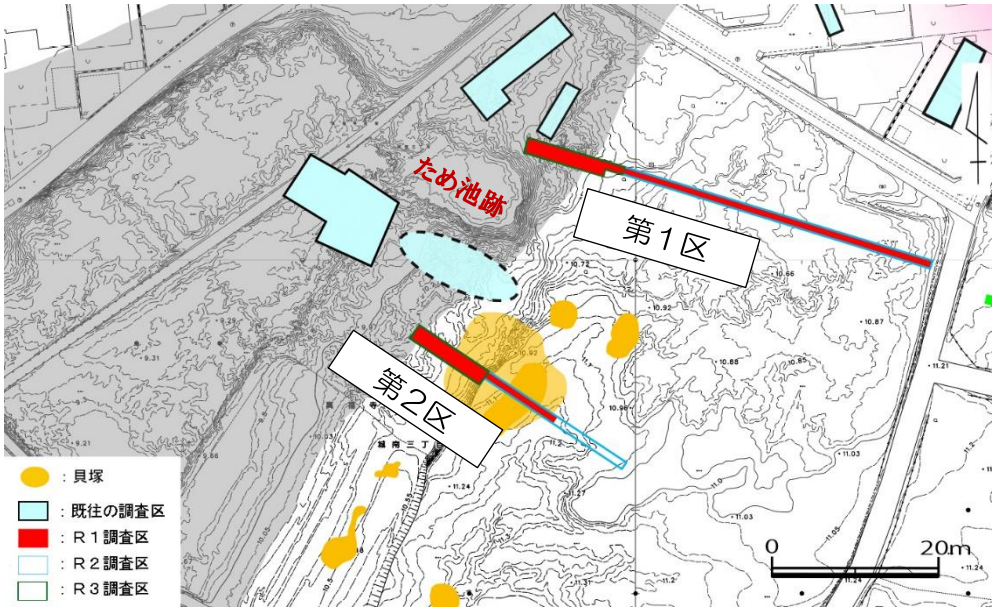

図１　調査区の位置

①　第１区（北側の調査区）の調査

昨年度の調査の最終段階で、厚く堆積する黄褐色土層が東西方向に切られる状況を確認しましたが（写真１）、これは昭和 40 年（1965）の慶應義塾大学の調査区である可能性が生じています。

今回、その中から見つかった木杭周辺の新しい掘り込みを完掘しました（写真２）。

木杭は、黄褐色土層を溜池側に階段状に

写真１　黄褐色土層を切る掘り込み（土のう袋が並ぶライン）

令和３年（２０２１）

写真２　新しい掘り込みの完掘状況

掘り込んだ縁辺部にあることがわかりました。 また杭から５０㎝ほど離れた場所から黄褐色土を掘り込んだ底に、板状の材が置かれたような状態で出土しました（写真３・４）。さらに、最初に検出した木杭の南側、杭の先端から３０㎝ほど下から直径３㎝ほどの小型の杭が複数本検出され、一部交差する様子も見られました（写真５・６）。

杭の材質（樹種）について、専門家に鑑定いただいたところ、材質はスギ材であること、

写真３　板材の検出状況（1）

写真４　板材の検出状況（2）

写真５　小型の杭列の検出状況（1）

写真６　小型の杭列の検出状況（2）

遺存状況から、当初懸念していた近現代よりは古そうであるという所見をいただきました。

なお、黄褐色土を掘り込んだ覆土中（板材周辺）から、18 世紀頃の瓦質土器（焙烙・ほうろく）の破片が出土しました。また近現代のプラスチックやビニール片は、調査区南西隅の排水用深掘り部分周辺に限定されることを壁面の土層観察や、覆土中の遺物の点検により確認しました。

したがって、木杭を伴う遺構は、江戸時代の所産で、溜池側へのアクセスのため一部縄文時代晩期中葉の黄褐色土層を掘り込み、足場確保のため底板を敷いたり、土留めを兼ねて木杭を打ち込んだりしたものだと考えています。

また、調査区西端から３～4m 付近では、晩期前葉（安行３b 式主体）の斜面堆積層の調査を並行して実施しています（写真７）。溜池側の黄褐色土を除去すると、縄文晩期前葉安行 3b 式を主体とする黒褐色土層が多量の遺物を伴い堆積している様子を確認しています（写真８）。

写真７　黄褐色土層より下層の調査（左が西）
※写真の中央右側。左側は、上位の黄褐色土層

令和３年（２０２１）

写真８　縄文時代晩期前葉の黒褐色土層（右が西）

この堆積土中からは、製塩土器の口縁部破片や土製耳飾なども出土しています（写真９・10）。

写真９　縄文時代晩期前葉の深鉢と一緒に出土した製塩土器（矢印）

※6 月の記事でも紹介した写真です。

令和３年（２０２１）

写真 10　土製耳飾り